

石川理紀之助

小・中学校道徳資料集



秋田県総合教育センター
ふるさと教育推進プロジェクト

目次

第一章 読み物資料

一 小学校「第3学年及び第4学年」

(1) かけ板の音はひびく	1
---------------	---

二 小学校「第5学年及び第6学年」

(1) 得がたいものは信頼です	3
(2) 民之助を追って 千島へ	5
(3) 「本当のリーダー」とは	8
(4) 谷頭の人々などいっしょに	11
(5) 農業の未来を開く	13

三 中学校

(1) 草木谷に暮らす	15
(2) 吉凶屏風訓言	18
(3) この土地の一員として	24
(4) 心のじょうぎ	28
(5) 教訓十四箇条	32

第二章 読み物資料の活用例

一 小学校「第3学年及び第4学年」

(1) かけ板の音はひびく	1 (2)	35
---------------	-------	----

二 小学校「第5学年及び第6学年」

(1) 得がたいものは信頼です	2 (3)	36
(2) 民之助を追って 千島へ	3 (1)	37
(3) 「本当のリーダー」とは	4 (3)	38
(4) 谷頭の人々などいっしょに	4 (3)	39
(5) 農業の未来を開く	4 (4)	40

三 中学校

(1) 草木谷に暮らす	1 (2)	41
(2) 吉凶屏風訓言	1 (5)	42
(3) この土地の一員として	2 (2)	43
(4) 心のじょうぎ	3 (3)	44
(5) 教訓十四箇条	4 (4)	45

第三章 学習指導モデル集

1 課題解決型の道徳学習例	46
2 総合単元型の道徳学習例	47
3 複数時間を設定した道徳学習例	49
付録 「道徳の内容」の学年段階・学校段階の一覧表	50

「第一章

読み物資料」

かけ板の音はひびく

「コーン、コーン、コーン。」

まだ暗い朝の三時、冷たい空気をつきさくようになかけ板の音が今日もひびきます。雨の日も風の日も吹雪の日も、石川理紀之助はかけ板を打ち鳴らします。

一八八二年（明治十五年）、全国的に米の値段が急落しました。これに加え、秋田では冷害となりました。米がとれない上に値段が下がったのですから収入は減り、至る所で借金に悲鳴を上げ、食べることも困る農民が増えたのです。理紀之助の故郷の山田村（今の潟上市昭和豊川山田）もまた借金にあえいでいました。

「この息も絶え絶えの農村を救うにはどうしたらよいのか。」

これまでに得た知識と技術をもとに山田村を立て直したいと、理紀之助は県庁職員を辞職して山田村に戻り、村人に次の提案をし、「山田経済会」をつくりました。



「かけ板」 つり下げた板を打ち、音で合図とした。

- 一 質のよい肥料を作り、倍の量を田に入れる。
- 二 収量が増えた分を借金返済にあてる。
- 三 おだづかいをやめ、必要なものは協同で買う。
- 四 養蚕を取り入れ副業に精を出す。
- 五 仲間外れが出ないように、助け合いはげまし合う。

「山田経済会」をつくると、理紀之助は毎朝三時にかけて板を打って村人を起こしました。そして早朝からみんなで力を合わせて農作業を行いました。山田村はこうして村人たちの努力と協力のおかげで、予定より早く五年間で村の借金をすべて返す事ができました。

ある吹雪の朝のことです。理紀之助がいつものように朝三時にかけて板を打ち終えて自宅に戻ると、妻がこう言いました。

「このような吹雪では、音も聞こえないだろうし、寒くてだれも仕事をしようとはしないでしょう。」

理紀之助はそれに対してこう答えました。

「そうかも知れない。しかし、わたしはこの村の人々のためだけにやっているのではない。ここから五百里（一里は約四キロメートル）離れた所の人々にも、五年後に生まれる人々にも聞こえるように打っているのだ。」

得^えがたいものは信^{しん}頼^{らい}です

「本当であれば、農^{のう}民^{みん}のみなさんといっしよに、毎^{まい}日^{にち}、泥^{どろ}にまみれながら仕事^{しごと}ができればいいのだが。」

石川理紀之助は、秋田^{けんちよう}県^{けん}庁^{ちよう}の職^{しよく}員^{いん}であり農^{のう}業^{ぎよう}指^し導^{どう}官^{かん}としての実^{じつ}績^{せき}をあげながらも、ただ指^し導^{どう}するだけでは限^{げん}界^{かい}がある、農^{のう}民^{みん}のみなさんといっしよに作^さ業^{ぎよう}をしながら学^{まな}び合^あいたい、いや、そうしないとだれも自分にはついてきてくれない、という思^{おも}いを日^ひ々^々強^{つよ}くしていきました。

一八八〇年（明^{めい}治^じ十三年）、理紀之助は意^いを決^{けつ}して、秋田^{けんちよう}県^{けん}各^{かく}地^ちで「老^{ろう}農^{のう}」と呼ばれた農^{のう}業^{ぎよう}の達^{たつ}人^{じん}に声^{こゑ}をかけ、自^じ主^{しゆ}的^{てき}な農^{のう}業^{ぎよう}研^{けん}究^{きゆう}団^{だん}体^{たい}「歴^{れき}観^{かん}農^{のう}話^わ連^{れん}」を結^{けつ}成^{せい}しました。理紀之助が三十五歳^{さい}の時^{とき}でした。

「歴^{れき}観^{かん}農^{のう}話^わ連^{れん}」には、はじめ七十四名の「老^{ろう}農^{のう}」が参加^{さんか}しました。それまで、それぞれ「老^{ろう}農^{のう}」が各^{かく}地^ちで個^こ人^{じん}で農^{のう}事^じ改^{かい}良^{りよう}を行^{おこな}っていました。それを理紀之助は農^{のう}民^{みん}を廣^{ひろ}く組^そ織^{しき}して集^{しゅう}団^{だん}的^{てき}研^{けん}究^{きゆう}に高^{たか}めたいと思^{おも}ったのです。「歴^{れき}観^{かん}農^{のう}話^わ連^{れん}」の会^{かい}合^{ごう}のたびに、理紀之助は近^{きん}くのお寺^{てら}や農^{のう}家^けに泊^とまり、自^じ炊^{すい}しながら種^{しゆ}子^し交^{こう}換^{かん}会^{かい}（今の種^{しゆ}苗^{びよう}交^{こう}換^{かん}会^{かい}、理紀之助が中心^{しんしん}となつて始^{はじ}めた）などの催^{もよお}しを支^{ささ}えました。夜^よになれば、時^{とき}のたつのを忘^{わす}れて仲^{なつ}間^{かん}と農^{のう}業^{ぎよう}について話^わし込^こみました。こうすることで理紀之助

は、農業への熱い夢と情熱を、みんなと共有したのです。「歴観農話連」による信頼の輪と固い絆は、こうしてだんだんと広がり、明治の末には会員が約五百名になりました。会員は秋田県にとどまらず、となりの山形県や宮城県、遠くは埼玉県からも集まりました。

振り返って理紀之助はこう言っています。

「何より得がたいものは信頼です。信頼は、つつみかくさず教え合うことから生まれます。進歩というのは、厚い信頼でできた巣の中で育つのです。」

【参考】

田中紀子著「農聖 石川理紀之助の生涯」（批評社）

民之助を追って 千島へ

「また家出か。今度はどこに行ったものかのう。」

十月のある日、夜になっても理紀之助の息子の民之助は、家に戻りませんでした。民之助はもう二十歳を過ぎておりましたし、以前にも何度か家出をしていましたので、あまり心配することはないと自分に言い聞かせてはみましたが、一週間たっても、一月たっても、正月を過ぎても、戻るところか連絡一つありません。民之助が立ち寄りそうなどころには、連絡を入れてみましたがいっこうにどこにいるのかは分かりませんでした。

一八八八年（明治二十一年）四月、理紀之助は何としてでも息子を探し出そうと覚悟を決めて、旅立ちました。理紀之助はまず、秋田県北部にある小坂や尾去沢、阿仁といった鉾山を片っぱしから探しました。以前民之助が、「鉾山で働いて学費をかせぐ。」と言っていたことを思い出したからです。しかし、どの鉾山でも、まったく手掛かりはありませんでした。

やがて、一週間ほどして理紀之助は、青森の港にたどり着きました。そこで調べてみると、去年の十月に函館に向かう船の名簿に、民之助の名前を発見しました。その後十一月には千島列島の国後島に行ったことも分かりました。もう少しで民之助に会えると思うと、うれしくてたまりませんでした。

流水のため船が出られない四、五日の間、出航はまだか、まだかと待っているところへ、国後から来た人と出会い、民之助のことを思い切ったずねてみました。するとその人は、「秋田から来た若い石川という男が、この春病気で死んだ。」と話したのです。理紀之助は驚き、それが本当のことであるのか確かめたい、いや間違っていることを確かめたいと、漁の船を借りて国後島へとなんとか渡ったのです。

さっそく役場に行ってみると、二月十七日に腸チフスで死んだという届書を見せられたのです。しかし、理紀之助には、紙切れ一枚では民之助が死んだとはどうしても思えません。せめて遺骨を見たいという思いだけが、理紀之助を前に動かすエネルギーとなったのです。

理紀之助は、案内人とともに民之助の墓を探して凍りついた山道を登りました。鉾山の事務所からさらに登ったあたりに火葬場らしき所があり、そこにいる人に墓をたずねると、笹やぶの中からむしろをかくせた石油ばこを見つけて出してきました。むしろをめくると、はこの底に焼けた土にまじって骨が入っていたのです。あまりにもみじめな息子の変わり果てた姿に、理紀之助は胸を締め付けられるような思いで、ただただその場に泣きくずれました。

※1 「腸チフス」

チフス菌に汚染された食べ物や水、手指を介して移る病気。高熱を出し、下痢、頭痛、全身のだるさなどを伴う。

※2 「むしろ」

わらなどの植物で編んだ簡単なしきもの。

「こんな人も通^{かよ}わないような所に来て、自分の学費をかせごうとしたなんて。こんなに寒い所^{さむ}でだれにもみとられずに死^しんでしまうなんて。なぜ、自分は学費を出してやらなかったのか。親^{おや}からの仕^し送り^{おく}で心にゆるみが出てはいけないと思い、言ったことではあったが、鉾^{こう}山の仕^し事^じがどんなものであるかは知らなかった。自分が情^{なさ}けなくて仕^し方^{かた}ない。秋田^{あきた}県^{けん}庁^{ちょう}に勤^{つと}め、家を留^る守^すがちにしても公^{こう}務^むに尽^つくすことが大切^{たいせつ}だと考えてきたが、果^はたしてこれ^{これ}は正^{ただ}しかったのだろうか。息子の本^{ほん}当^{たう}の心^{こころ}に触^ふれることのできない者^{もの}に、他^た人^{にん}を本^{ほん}当^{たう}に思^{おも}いやることなどできるだろうか。」



<http://www.sekaichizu.jp/>

【参考】

田中紀子著「農聖 石川理紀之助の生涯」(批評社)

「本当のリーダー」とは

石川理紀之助は、一八八八年（明治二十一年）の秋に、長年にわたって取り組んだ山田村経済会の成果や、農業作物の栽培方法を研究して学んだことをまとめた「教訓十四箇条」を発表しました。これは、理紀之助が農家の経済を立て直すためにまとめたものですが、リーダーとしての心構えについてもつながる部分が多いので、少し分かりやすいように読み替えてみました。

教訓十四箇条

一、寝ていて人を起す事なかれ

自分は寝たままで人を起こすような横着なことをしてはいけない
自分から進んで行動して手本を示しなさい

二、遠国の事を学ぶには先づ自国の事を知れ

遠い外国のことを学ぶ前にまずは自分の国のことをよく知りなさい
まずは自分の役割をしっかりと果たしなさい

三、資金をのみ力にして起こす産は破れ易し

お金にものを言わせて起こすものはくずれてしまいやすいものだ
成功させるにはよく考えて行いなさい

四、金満家の息子は多く農家の義務を知らず
金持ちの子どもは、農家の本当の心を知らない
相手の本当の心を知りなさい

五、経済は唯だ沢山に金銭を持つ事に非ず
もうけるということはお金をただたくさん持つことではない
まずは自分の心を豊かにしなさい

六、勧業の良結果は多く速成を要せざるにあり
産業でよい結果を得ようとするなら、速さだけを追求しないことだ
よい結果が出るまで努力を続けなさい

七、農家にして蓄財を望まば耕地に貸付けて利をとれ
農家で財産をためようと思うなら、耕地に貸付をして利益を上げなさい
自分がやるべきことに専念しなさい

八、樹木は祖先より借りて子孫に返すものと知れ
樹木は祖先から借りたものであり、子孫に返すものと思いなさい
人や物を大切に扱いなさい

九、人力のみにて成就するものは永久の産とならず
人の力だけで成し遂げたものは、永久に残るものとはならない
後々まで残るように、よく考えて事を成しなさい

十、子孫の繁栄はんえいを思おもはば草木ばいように培養もつする事を以もとて悟さとれ
子孫の繁栄を願うのであれば、草木を育てるようなものだと思いなさい
人に愛情をもつて優しく接しなさい

十一、国の経済を考えて家の経済を行おこへ
国全体のことを考えて家計を行いなさい
みんなのことを考えて自分のすることを考えなさい

十二、豊年ほうねんにも大凶作だいきようさくあり氣をつけて見よ
豊作の年でも地域によっては不作な所もあるので、氣を付けて見なさい
細かいところまで振り返り、次に生かしなさい

十三、金銭きんせんは濫みだりに集める事易くして能く使うことは難かたし
お金をただ集めるだけなら簡単だが、有効に使うことは難しい
人を集めるだけでなくよさを生かして使いなさい

十四、僥倖ぎやうしやうの利益りえきは永久えいきゆうの宝にあらず
思いがけない幸運で手に入れた利益は永久の宝にはならない
次に残るように地道に努力しなさい

【参考】 田中紀子著「農聖 石川理紀之助の生涯」(批評社)

谷頭たにがしらのみんなといっしょに

一九〇二年（明治三十五年）、石川理紀之助は、七人の仲間とともに宮崎県庄内村谷頭（今の都城山田町）を訪れました。前田正名という宮崎県の開田開発事業を行っていた人に熱心にさそわれ、この村を立て直すために農民の指導に來たのです。理紀之助は谷頭に着くなり、立て直すための村人の日程表を作り、翌朝三時に起床のかけ板を打ち鳴らしました。しかし、だれも起きずに仕事にも來ません。「だれも來ないのはどうしてだろう。様子を見て來よう。」

理紀之助らは、谷頭の様子を見てびっくりしました。この地区は、霧島山のふもととの火山灰でおおわれた台地で、樹木も十分に育ちません。あちらこちらに竹林がしげっているくらいです。畑もまばらで小さな芋しかとれません。村人たちは、もと鹿児島県桜島の近くに住んでいた人で、噴火の難をのがれてきて住み着きました。自分たちは貧しいけれど、これで仕方ないのだと、みんなあきらめきっています。理紀之助は、村人たちを集めて村を立て直すための方針を話そうとしましたが、秋田弁と薩摩弁では話も通じず、筆談をしようにも谷頭の村人は読み書きもできない人が多いのです。

事務所に戻った理紀之助は、秋田からいっしょにやってきた仲間に対して、静かにこう言いました。

「わたしたちは、まず指導^{しど}しに來たという考えは捨てよう。この村の一員となりきって行動しよう。この村の欠点^{けってん}や村人の悪い点を決して口にせず、自分たちの生活や行動で氣付^{きづ}かせるようにしよう。」

それから、理紀之助たちは、村人に自分たちから進んであいさつをするようになりました。また、朝仕事をして得^{とく}したことをみんなに話すようになりました。このほかにも、理紀之助は村の子どもたちに事務所^{じむしょ}で、礼儀作法^{れいぎさほう}、算術^{さんじゆつ}、読書、作文、竹細工^{たけざい}などを教える夜学^{やがく}も行いました。少しずつ早起^{せきし}する人、朝仕事をしてたくわえをする人が増^ふえ、村は少しずつ、少しずつ、しかし確実^{かくじつ}に変わっていききました。

理紀之助が前田^{まえだ}正名^{まさな}と約束^{やくそく}した期間^{きかん}の六か月はあっという間に過^すぎ、秋のさわやかな風が吹き始めるころになって、いよいよ谷頭^{やがしら}を去る日が來ました。出発の朝三時には、二百人以上の夜学生と村のお年寄^{としよ}りや若者^{わかもの}たちが集まり、別れを惜^おしんどどこまでもどこまでも後を追^おってきます。理紀之助が「帰れ。」と言ってもだれも帰らず、たいまつをかかげてどこまでもついて來るのです。理紀之助は、別れを惜しむ村の人たちの純粋^{じゆんすい}な氣持ちに涙^{なみだ}を流さずにはいられませんでした。

【参考】

田中紀子著「農聖 石川理紀之助の生涯」(批評社)

農業の未来を開く

一八七八年（明治十一年）、南秋田郡八橋村（今の秋田市八橋）の県営植物園で、石川理紀之助が中心となり農作物の種子を交換し合う種子交換会が開催されました。これ以来、種子交換会は種苗交換会と名前を変えながらも、昭和恐慌※¹や太平洋戦争※²などの困難を乗り越えながら一年も休まずに開催され、伝統を守りながらも、他の関連行事をも巻き込みながら、秋田県最大級のイベントとして発展してきました。

石川理紀之助が県庁職員だったころ、秋田県産業の中心だった農業には大きなしこも緊急の問題がたくさんありました。その一つが「腐米」です。乾燥方法がしつかりとしたものではないために、収穫した翌年春には米がぐさってくる病気です。ただでさえ寒冷地で稲作が困難な地域に、この稲の病気がはやったのです。理紀之助は原因を追及し、収穫時の米の乾燥方法に新しいやり方を編み出して、功績をあげました。

また、当時は桑や菜種、果樹などの商品作物の発展、西洋技術の導入、今までの農業方法の改善などが秋田県農業の課題としてあげられていました。しかし、「老農」と呼ばれる農業の達人たちは県内各地で農事改良に努めてきたものの、お互いの知識や技術を進んで公開することはあまりありませんでした。そこで、理紀之助は

「老農」^{ろうのう}たちを動かし、手作りの作物の種子^{しゆし}を持ちより、お互い^{たが}に見せ合い、交換^{こうかん}し合う種子交換会^{しゆしこうかんかい}を開催^{かいさい}したのです。

第一回の出品数^{しゅつぴんすう}は、稲^{いね}六十五点、大豆^{だいず}十九点、小豆^{あずき}六点等、合計百八十九点というものでしたが、回を重ねるごとに増え続け、二〇一五年（平成二十七年）の第百三十八回鹿角市大会^{かづの}の出品数^{しゅつぴんすう}は、合計一、九三一点を数え、八十万人以上の来場者^{らいじやうしや}を得る^えなど、日本一長い歴史^{れき}と集客力^{しゅうきやくりよく}をもつ大きな大会となったのです。



【参考】

田中紀子著「農聖 石川理紀之助の生涯」（批評社）

JA秋田中央会ホームページ「先人に学び農業の未来を開く」
広報「かづの」平成二十七年十二月一日号

※1 「昭和恐慌」^{しやうわきやうこう}

一九三〇年〜三一年にかけて、アメリカで始まった世界恐慌^{せかいきやうこう}の影響^{えいぎやう}で、日本の経済状況^{けいざいじやうきやう}もとても悪くなった。

※2 「太平洋戦争」^{たいへいやうせんそう}

一九四一年〜四五年にかけて、日本、ドイツ、イタリアなどを中心とする国々と、アメリカ、イギリス、オランダなどを中心とする国々との間で起こった世界的な戦争。

草木谷に暮らす

「石川理紀之助の経済論は理屈としてはおもしろく、中等以上の暮らしをする者には適當かも知れないが、今日の食べ物にも困っている貧農の者には、この経済論は役に立たない。」

「理紀之助が山田村を改善したと言っても、まだ完全ではない。だいたい理紀之助は相當の資産家の家に生まれて、養子先の石川家も一時傾いたとはいえ元は資産家、したがって極貧者の暮らしというものは理解していない。貧しい家に限って病人があったり、子だくさんであったりして、貧乏人にはいくら働いても儉約すべき余裕などないのだ。」

理紀之助が上京し、農商務省で農家経済の方策を講演した後、世の中には彼の経済論にこのように反論する者が現れた。これを聞いた理紀之助は、いつか極貧生活を実験してみようと自らの心に誓ったのである。

理紀之助は、長男民之助の遺骨を抱いて村人に隠れるようにして帰った後、民之助の葬式を済ませると、まもなく、他家へ養子にやった次男の老之助を呼び戻し、わずか十八歳の老之助に家督をゆずり、自分は母家のそばの間口三間（一間は約一・ハメートル）奥行き五間の小屋を二つに仕切って、その半分を物置に、半分を住家としてそこに引き移った。

理紀之助は一人の部屋で静かに反省してみる時、自分では何も言わなくても、他の人にとっては何となく窮屈さを感じさせるものが自分にはあるらしいと思った。家督をゆずった以上、老之助に窮屈な思いをさせてはならないと思い、さっそく小屋に移り、その小屋を「廃物利用庵」と名付けた。しかし、別居したとはいえ、母家のすぐそばであり、老之助たちにしてみれば、いつも父親に見られているという意識があるに違いないと思うと、やはり自分は母家からもっと離れて、米、味噌なども一切自給自足して、自分の力で生きていこう、自分に貧乏人の気持ちがないならば、それによって分かるようにしようと、草木谷への移転を決めた。

理紀之助の草木谷の小屋は、本宅から二十余町（一町は約百九メートル）離れた沢地であった。縄と鍬と米三升五合を老馬に付けて移ってきから半年が経っていた。ここは養父長十郎が昔開墾した九反歩（一反は約一〇〇〇平方メートル）ほどの田地があったが、沢地のため水が冷たかったので、そのうちの三、四反歩は実りが悪く、いつも小作人から苦情の絶えないほどの痩せ地であった。しかし、田地にする余地があったので、理紀之助はこの開墾を思い立ったのである。人手を借りて、まずかややわら、むしろだけで寝起きする小屋を作った。しかし、ここは低地であったから、豪雨には谷水があふれ、嵐にはわら屋根がとばされるといふありさまであった。

この頃、たくさんの青年や子どもが山居を訪れ、済民救済方法を尋ねたり読み書きを習ったりしていたようである。ある時は、畑から収穫した雑穀のみで生活する場合の参考にとじゃがいもの食用法の研究をした。理紀之助は一切の食物を本宅に運んで預けておき、塩だけを残して毎日じゃがいもを煮て食べた。二、三日は無事であったが、それから著しい空腹を感じたが、いもを手にするだけでのどが詰まったような状態になり、口に無理に入れたいもがなかなか胃まで落ちていかなかった。労働をしようとしても汗ばかり出て少しも力が出ないばかりか、胸がつまったような感じで口をきくこともできなくなった。身体は綿のように疲れてきて、とにかく五日目までは何とか我慢できたが、一週間目になるとどうにも我慢ができない。八日目とうとう本宅から取り寄せた米飯を食べた時のおいしさは格別であった。理紀之助にとって、食物のありがたさ、飢饉の恐ろしさをしみじみと感じた命がけの体験となった。

理紀之助の草木谷山居の日常生活は、半日は馬の飼料と自分の食料を整えるために費やし、残り半分では満足な働きはできないので夜業を増して、身体が続く限り働いた。睡眠は夜間十二時間のうち六時間に決め、残りの六時間を夜業の時間とし、一日平均十二時間働き、力仕事のほか畑及び家で働く仕事はたいがい一・五人分の仕事をした。また、飢饉の用意はどの程度できるかを試し、一日五合炊く米飯のうち、一合は別の桶に入れて貯え、乾し飯として保存した。その結



草木谷山居の風景

果一八八九年（明治二十二年）から一八九二年（明治二十五年）の山居生活で千日目を迎え、一合ずつの米が一石（一石は一〇〇〇合）貯まったことになった。このような努力で、一年の純益は当時の値段でおよそ二百円（今のお金にして二百万円ほど）で、地所の代価を引いても一年百円以上の利益があったことになり、いかなる貧民も怠ることなく努力すれば、この通りの利益があることを理紀之助は身をもって立証することができた。

一八九八年（明治三十一年）に山居が火災に遭い、理紀之助は一切のものを失ってしまった。しかし、その際の見舞い客、見舞い状合わせて二百三十三人にもおよんだ。現在残されている草庵は、焼失を聞きつけた弟子たちが駆けつけ、わずか五時間で再建したもので、『五時庵』と呼ばれている。理紀之助はこれらに対する礼状に、こう記して送った。

「心の蔵書焼残り候」

【参考】

田中紀子著「農聖

石川理紀之助の生涯」（批評社）

吉凶屏風訓言きつぎょうびょうくんげん

石川理紀之助は、六十一歳の一九〇五年（明治三十八年）五月九日、尚庵しょうあん（理紀之助が晩年ばんねんの十年を過ごした庵いおり）にて静かにこの書を書き上げた。これは、今までに山田経済会などで立て直しに関わってきた山田村の人々に向けて、残すべき訓書くんしょとして書いて作った屏風である。

○ 天地の御恩ごおんをわするべからず。

自然の恵みや身の回りのことへの感謝を忘れてはなりません。

○ 産土神うぶすながみ氏神うじがみを敬い祖先の御墓を大切にすべし。

その土地に伝わる神様や、地域で共同でまつる神様、先祖代々のお墓を大切にしなさい。

○ 父母をはじめ、すべて老人を大切にすべし。但しただよきものを喰くわせ着するより心に苦勞かけべからず。

両親をはじめすべての老人を大切にしなさい。ただし、よいものを食べさせよい衣服を着せるよりも、心配や苦勞をかけないようにしなさい。

○ 兄弟姉妹嫁姑よめしゅうとめの間睦むつかるべし。

兄弟も姉妹も嫁もしゅうとめ（義理の親）も仲よくしなさい。

○ 女房にようぼうのいうことを、みだりに用もちゆべからず。

妻が言ったことを、みだりに使ったり、ほかに言いふらしてはなりません。

（身近な人の言うことでも、よく考えないで信用して使ってはいけないという意味）

○

子孫の愛におぼれて、我^{わが}俸^{まま}さすべからず。

子どもや孫を愛するがあまり、わがままをさせてはなりません。

○

父母なき子、夫妻におくれし老人、かたわ、病人はめぐむべし。

親を亡くした子や、子どもを亡くした親、身体に障害のある人、病人などを大切にしない。

○

みだりに生物殺すべからず。

いたずらに理由もなく生き物を殺してはなりません。

○

すたれるものは、人も器物もなるべく用^{もち}ゆべし。

盛んでなくなったり、役目がなくなってしまうたりしたような人や器物も、なるべく役割を与えて使うようにしなさい。

○

村中は殊^{こと}に睦^{むつ}じくすべし。

地域の中の人とは特に仲よくしなさい。

○

正直と礼を正しくすべし。

正直であることや礼儀正しいことを大切にしなさい。

○

自ら働きて人をつかうべし。

自分から積極的に働いて、人に手本を見せて使うようにしなさい。

○

人の上はいふべからず。

上から目線で言うてはいけません。

○

万事堪忍すべし。

何事もじっとこらえてがまんしなさい。

○

難儀なる事は自分にして、易きことは人にゆずるべし。

辛くて大変なことは自分でして、かんたんなことは人にゆずりなさい。

○

人より仇あだされたらば、恩おんにて返すべし。

人からひどい仕打ちをされたら、かえって情けをかけて返してあげなさい。

○

物知り顔すべからず。

何でも知っているような顔をしてはいけません。

○

予算をたてて竈かまどを持つべし。

予算を立ててしっかりとした会計を行いなさい。

○

朝寝夜更あさねよふかしすべからず。

朝ねぼうや夜ふかしはしないようにしなさい。

○

遊芸ゆうげいを学ぶべからず。

茶の湯・生け花・音曲・舞踊などの遊びごとに関する芸能は学んではなりません。

○

ひまあらば学問すべし。

時間を見つけて勉強しなさい。

○ 無^む尽^{じん}を建^{たて}べからず、加^か入^にすべからず。

無^む尽^{じん}講^{こう}（一定の口数と給^{きゅう}付^ふ金^{きん}額^{がく}を決^けめ、加^か入^に者^{しや}から定期的にお金を集め、抽^{ちゅう}選^{せん}や入^い札^さによ^より金品を給^{きゅう}付^ふするこ^{こと}）を作^{つく}ったり、加^か入^にしたりしてはなりません。

○ 利^り益^{えき}ありとて、家^け業^{ぎやう}の外^{ほか}の事^{こと}すべからず。

利^り益^{えき}があるからといって、家^け業^{ぎやう}の範^{はん}圍^い以外^{いがい}のこ^{こと}はしてはなりません。

○ 家^け産^{さん}は祖^そ先^{せん}のもの也^{なり}。

家^けの財^{さい}産^{さん}は今の自^じ分^{ぶん}のものではなく、祖^そ先^{せん}から一^{いつ}時^じ的^{てき}に預^よかっているものです。

○ 人^{ひと}の保^ほ証^{しやう}となるべからず。

他^た人^{ひと}の保^ほ証^{しやう}人^{にん}になっ^なつ^つてはいけません。

○ 馬^ば口^く勞^{ろう}すべからず。

馬^ばや牛^{ぎゅう}の売^{ばい}買^{がい}をし^してはいけません。

○ 大^{だい}酒^{しゅ}呑^のむべからず。

大^{だい}酒^{しゅ}飲^のみになっ^なつ^つてはいけません。

○ 博^{ぱく}奕^ちは勿^も論^{ろん}かけごとすべからず。

賭^と博^{ぱく}はもちろ^{もちろ}んのこ^{こと}、小^{せう}さなかけごとにも手^てを出^でしてはいけません。

○ 煙^{えん}草^{そう}のむべからず。

た^たばこを吸^すつてはいけません。

○

流行に入るべからず。

流行にあまり深入りしてはいけません。

○

深く料理を好むべからず。

あまり深く料理に取り入ってはいけません。

○

地形の境を正しくすべし。

地形の境界線を正しく保ちなさい。

○

山林を大切にすべし。

山林を大切にしなさい。

○

貯金、飢饉、備等怠るべからず。備は貸すべからず、度々取替るべからず。

貯金や飢饉などへの備えを気をゆるめて忘れてはなりません。また、備えを人に貸してはなりませんし、あまりひんばんに取り替えてもいけません。

○

組合及村中の者へ必貸すべからず。

組合の者や村の者だからといって、必ず金を貸さなければいけないわけではありません。

○

此屏風を用いる婚礼と葬式は人の竈に奢の入る時也。慎むべし。貢租は勿論、他に収むるべきものは窮する程速にすべし。

この屏風を使う婚礼や葬式の時は、ぜいたくになりがちなので気を付けなさい。年貢などの税金はもちろん、納めるべきものは、困っているほど迅速に行いなさい。

○ 經濟会は同じことにても、相談の上すべし。

經濟会のことは、以前と同じことであっても、必ず相談してから行うようにしなさい。

○ 此こと一身に行わざれば身修^{みおさ}まらず、一家に行わざれば家おとろふ^②、一村に行わざれば村

みだるる。慎^{つつし}むべし。

これらのことを自分で行わなければ、自分自身に生きてこないし、一家で行わなければ家がおとろえる。村全体で行われなければ、その村が乱れていく。そうならないように気を付けなさい。

【参考】 田中紀子著「農聖 石川理紀之助の生涯」（批評社）

いの土地の一員として

一九〇二年（明治三十五年）四月、石川理紀之助と同志七人は宮崎県を目指し、旅立ちました。なぜ、彼らは秋田からの電車も開通していない時代に、九州に向かったのでしょうか。

九州行きのきっかけは、尊敬^{そんけい}している前田正名^{まえだ まさな}からの一通の手紙でした。その手紙には、「私は数年前から、霧島山^{きりしま}のふもとの台地に用水路を作り、開田事業を行ってきている。ようやく完成し、いよいよ五百町歩（一町歩は約一ヘクタール）の開田をし、新しい農村をつくろうとしている。この際、あなた及びあなたの同志数名から来てもらい、あなたたちの理想の村づくりをしてもらいたいと思っている。どうか、この正名に御協力をお願いする。しかし、私は現在、資金は何もなくなってしまった。よって、日当、報酬^{ほうしゅう}はもちろん、往復の旅費も支払うことはできない状態である。だから自費でお願いしたい。」とありました。

理紀之助は、尊敬する前田正名からの依頼ではありましたが、同志に無報酬で同行してほしいと言ったら、どのような反応をするのかと思いました。

年が明け、同志に正名からの手紙の内容を話すと、家族と相談してそれぞれ大変な無理をして、大金約百円（今のお金にして百万円ほど）を集め、七人の同志が九州へ同行することになりました。理紀之助は正名に手紙の返事を書きました。

「九州へは四月から十月までの六か月、私と同志七人でいきます。」

理紀之助は、いつ死んでもいいように、家族に財産を分け与え、旅の途中では何があっても秋田に帰らないと宣言して旅立ちました。そして、二十日間かけて、宮崎県庄内村谷頭（今の都城市^{みやこのじょうし}山田町）にやってきました。一行は、わらじを脱いで、板の間に上がると、すぐに日課表を壁に貼り付けました。

午前二時	起床	四時まで各自勉学
午前五時	朝食	
午前六時〜十二時	勤務	
午後一時〜四時	勤務	
午後五時	晩食	
午後八時	就寝	

農家経済指導とは、言いかえれば、勤勉と節約を中心とした生活指導です。

「この村に來た以上、一日の休みもあり得ない。すぐ仕事に取りかかるのが当然である。」

秋田県から來たこの指導者たちは、非常な決意をもって、この村に乗り込んできたのです。

到着した谷頭地区は、桜島の噴火ふんかのとき、難を逃れてきた人々が住み着いたところでした。霧島きりしま山の火山灰でできた台地なので、樹木もあまり育たず、畑では芋しかとれないような貧しいところでした。そして、水がないため、前田正名は莫大ばくだいな投資をして用水路を作り、谷頭まで水を引き、稲作を始めて活気のある村づくりをしようと計画していました。

理紀之助は今までやってきたように、板木はんぎを午前三時に打ちましたが、村人は誰も起きてきません。午前七時を過ぎてから悠々と畑に出て行くありさまです。自分たちの生活が極貧ごくひんで、他地域から見下されていると分かっているにもかかわらず、そういうものとあきらめて、格別気にもしていません。

「一生懸命働いて」という気もなく、副業もない。貯金とはどういうことかも分からない。自分たちの地域と比べてあまりにも劣る生活程度にとまどう一行でした。

このような状態を見て、理紀之助は、同志七人に次のように言いました。

一 私どもはまず指導しに来たのだという考えを捨て、自分もこの土地の一員となりきって行動するようにすること。

二 この土地の欠点、ここの人々の劣っていることを決して口にしないこと。

欠点を直そうと思ったら、私どもの生活、行動で気付かせるようにしていくこと。

三 農業のことを聞かれても、自分の知識、体験だけで断定的な話をしないようにすること。

また、理紀之助は日記に次のように書いています。

私どもは、私どもの信じている生活を貫き通していくことに専念して、口先で教えようとしてはいけない。自分たちも、この土地の一員として生活するものであるとするなら、自分たちは、よそ者であることになる。よそ者であるなら、よそ者の方から「おはよう」と声をかけ、「よろしく」という心を込めてあいさつするのが当然である。この当然のことを実行していったら村人も自然に明るく会釈するようになってくる。

そして、「隣となりの村からわらを買ってきて、わらじを作やって売りに行ったら、十銭せんの利益があった。」などと、得をしたことを教えたり、事務所やで夜学会がくかいを開き、子どもたちに勉強を教えたりしました。最初は誰も話を聞こうとしませんが、一行の誠実な行いを目の当たりにした村人たちは、少しずつ心を開き、板木の音で早起きするものが増え、だんだん谷頭が活気ある村になっていきました。

約束の六か月はあっという間に過ぎ去りました。理紀之助一行が谷頭を去る十月一日の午前三時。最後の板木が鳴り響きました。村の老若男女ろうにやくなんによが別れを惜しみ、たいまつをかかげ、各地区ごとに二百人ものが大きな声で泣きながら見送りました。最後に理紀之助が、「見送りはもういいから帰れ。」と言っても帰らない人たち。理紀之助一行も涙を流さずにはいられませんでした。

【参考】川上富三著「板木のひびき・石川理紀之助翁伝」

心のじょうぎ

「『寝ていて人を起こすことなかれ』の言葉は、子どもの頃から何度も聞いて覚えていました。」
秋田から遠く離れた宮崎県都城市山田町のある家庭の床の間には、毎年正月に石川理紀之助直筆の「教訓十四箇条」が飾られます。ここは、理紀之助と同志七名が農業指導に訪れた際※¹に、夜学生として指導を受けた方のご子息たちの家庭です。理紀之助の教えが百年経った今でもこの地で脈々と受け継がれているのです。

その夜学生のご子息の方が、五十年以上前に秋田から送られたという「石川先生教訓集『心のじょうぎ』』という一冊の本を、この言葉といっしょに静かに差し出しました。

「石川先生の教えは、ずっと私の心の支えになっているのですよ。」

石川先生教訓集「心のじょうぎ」（原文のまま）

昭和三十二年九月五日

財団法人石川翁遺跡保存会認可記念

発行者 石川榮太郎

すべて人間には、心のじょう木が必要である。

何人もみな、それぞれの心のじょう木をもつべきである。

これが必要ならば、万事ばんじについて迷うことが多い。

たとへば、世の流行(え)に対しても、

心のじよう木をもつていれば、

之これをはかつて、じよう木にあえばとり、

あわねば、いかに勢いの強い流行でも、

これに従わない。

これ即ち、取捨選択しゅしゃせんたくのよろしきを得るゆえんである。

しからば、いかにして、

じよう木をつくるかと云いうそは（それは）、

東西古今ここんの聖賢せいけんの教訓によるべきである。

聖賢の教訓は尊とつといものであるから、

よく心に入れて、更に日常これを実行して見て、

はたして実時実際じつじつさいに適すればこれをとり用い、

しからざれば、たとい聖賢せいけんの教えといえども、
これをとらぬようにせねばならぬ。

かくして、たえずこれをねつて行くべきである。

もつとも、じょう木が、できれば守る所が出て来て、

容易に、世の風流ふうりゅうに従わぬようになるので、

世間からはへんくつ者と云われる。

予などは、よくその、ような世評せひようをうけた。

けれども、予には、予の、じょう木があるから、

たとえ世評がどうあろうとも、

予は予が心のじょう木に従う外はない。

（これは児玉庄太郎※₂先生が直接、石川理紀之助から教えられたことばです）

※1 本資料集「谷頭のみんなといっしょに」「この土地の一員として」を参照

※2 児玉庄太郎（こだましようたろう）一八七四～一九五九

明治―昭和時代の教育者。秋田県立高等女学校校長などを歴任。のち、
愛国女学館や秋田服装専門学校を創立。

石川理紀之助の事績に影響を受け、農村教育にも精力を傾けた。

【参考】 武石 薫 大谷順子『『改革者』たちの軌跡』（NPO法人 秋田グリーンサム倶楽部）

教訓十四箇条

石川理紀之助は、長男民之助の死からほどない一八八八年（明治二十一年）の秋に、当時の農商務大臣井上馨から、上京して講演せよとの命を受け、農商務省で農家経済の方策について講演を行った。理紀之助が長年にわたって取り組んだ山田村経済会の成果や、明治初年以來取り組んできた稲作培養法やじゃがいも培養法などについて話した後、これらの取組で学んだことをまとめた「教訓十四箇条」を発表した。

一、寝ていて人を起す事なかれ

自分は寝たままで人を起こすような横着なことをしてはいけない。
（自分が先頭に立って行動して手本を示さないと人を動かすことはできないという意味）

二、遠国の事を学ぶには先づ自国の事を知れ

遠い外国のことを学ぶ前にまずは自分の国のことをよく知りなさい。
（高度な知識を得たいと思うなら、その前に基礎をしっかりと習得しなければいけないという意味）

三、資金をのみ力にして起す産は敗れ易し

お金にものを言わせて起こすものはくずれてしまいやすいものだ。
（お金だけに頼って事業を行えば失敗しやすい。物事を成功させるには頭を使わないといけないという意味）

四、金満家の息子は多く農家の義務を知らず

大金持ちの家の息子は、農家の人々の仕事をよく知らない人が多い。
(金持ちの子どもは、本当の農家の心を知らないという意味)

五、経済は唯だ沢山に金銭を持つ事に非ず

もうけるということはお金をただたくさん持つことではない。
(農家の経済はただ金持ちになることではなく、心を養うことであるという意味)

六、勸業の良結果は多く速成を要せざるにあり

農業や工業などの産業でよい結果を得ようとするなら、速さだけを追求しないことだ。
(産業を奨励して成果を得るには近道はなく時間がかかるものだ、結果を急いではならないという意味)

七、農家にして蓄財を望まば耕地に貸付けて利をとれ

農家で財産をためようと思うなら、耕地に貸付をして利益を上げなさい。
(農家の基本は農地である、農耕地に手を加えて収益を上げなさいという意味)

八、樹木は祖先より借りて子孫に返すものと知れ

樹木は祖先から借りたものであり、子孫に返すものと思いなさい。
(木々は祖先から授かったもので、みだりに自分で処分してはいけないという意味)

九、人力のみにて成就するものは永久の産とならず

人の力だけで成し遂げたものは、永久に残るものとはならない。
(人の力だけで成し得たものは長く続かない、よく考えて事を成しなさいと言う意味)

十、子孫の繁栄を思はば草木に培養する事を以て悟れ

子孫が繁栄するように願うのであれば、草木を育てるようなものだと思いなさい。
(子孫の繁栄を願うなら草木を育て養うことが大切である。それが農業の原点であるという意味)

十一、国の経済を考えて家の経済を行へ

国全体のことを考えて家計を行いなさい。
(国全体の利益を考えて自分の家の利益を考えなさい。国の流れをよく見て考えなさいと言う意味)

十二、豊年にも大凶作あり気をつけて見よ

豊作の年でも地域によっては不作な所もあるので、気を付けて見なさい。
(豊作の年でも大変な事態が起きるかも知れないので、注意深く観察しなさいと言う意味)

十三、金銭は濫りに集める事易くして能く使うことは難し

お金をただ集めるだけなら簡単だが、有効に使うことは難しい。
(お金というものは貯蓄することは簡単だが、有効に使うことは難しいという意味)

十四、僥倖の利益は永久の宝にあらず

思いがけない幸運で手に入れた利益は永久の宝にはならない。
(難儀しないで偶然に手に入れたお金は長続きしない。地道に苦勞してお金を稼がなければならぬという意味)

【参考】

田中紀子著「農聖 石川理紀之助の生涯」(批評社)

「第二章

読み物資料の活用例」

かけ板の音はひびく（小学校中学年1―②）

一 ねらい

自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げようとする心情を育てる。

二 資料の特質

・この段階においては、自分がやらなければならないことだけでなく、更に自主性を発揮し、自分でやろうと決めたことに対して積極的に取り組み、粘り強くやり遂げる精神を育てることが大切になる。そのためには、あきらめずに取り組むことの意義や、今よりよくなりたいと願い、努力しようとする姿について考えを深めていくことが求められる。そのためには、教師の励ましや賞賛が一層重要になる。

・本資料は、石川理紀之助が自分の生まれた山田村を立て直す際に、村人に五つの提案をして「山田経済会」をつくり、早朝からかけ板を打って村人を起こし、みんなで力を合わせて農作業を行って借金を返した話である。後半には理紀之助の、全国の農民のため、未来の農民のためにという確固たる信念が分かる言葉もある。やらなければいけないと決めたことには、更に自主性を発揮して実践しようとする姿を期待したい。

三 展開例

1 自分が今取り組んでいる仕事や役割について、どんなことをしているか、またどんな気持ちでしているかについて発表する。

2 資料「かけ板の音はひびく」を読んで、話し合う。

(1) 自分のふるさとの山田村を救おうとした理紀之助は、どんなことを考えていたのでしょうか。

・何としても助けたい。自分に何かできることはないか。

・今まで学んだことを生かせばきつと立て直しができる。
(2) 理紀之助は、どんなことを考えながらかけ板を打ち鳴らしていたのでしょうか。

・今よりももっとみんなでよくしたい。
・みんなのために、自分が先になって頑張ろう。
・やろうと決めたことだから最後までやり遂げよう。

(3) 妻にやめたらと言われたとき、理紀之助は何と答えたでしょう。
・自分のためにも決めたことはやり続けるよ。

・山田村の人たちのためだけでなく、もっとみんなといっしょによくなりたい。

3 自分自身を振り返って話し合う。

・学校や家庭などで、自分で決めたことをやり遂げた生活経験を振り返り、そのときの気持ちや考えについて話し合う。

4 「わたしたちの道徳 小学校三・四年」の『今よりもよくなりたい』という心を大切にしよう」（二十二頁）を読んで、学習のまとめをする。

四 指導上の留意点及び工夫

・展開例1では、係活動や当番活動などやらなければいけない仕事に取り組んでいるものの、続けることの大変さや、友達との関わりの中からの困難などを抱えている自分がいることに気付かせようにする。

・展開例2の(1)では、理紀之助が山田村の人々に自ら提案して「山田経済会」をつくったことに目を向けさせ、自主性を発揮してよりよい生活にしようとしたことに気付くことができるようにする。

・展開3で経験を想起する際、具体的な場面が出やすいように、展開例1の発表した板書を残し、やり遂げられたときの気持ちや秘訣を中心に考える手がかりとする。

得がたいものは信頼です（小学校高学年2―③）

一 ねらい

互いに信頼し、学び合って友情を深め、協力し助け合おうとする心情を育てる。

二 資料の特質

・この段階においては、これまで以上に友達を意識し、仲のよい友達との絆を深めていく一方、若者の流行などにも敏感になり、趣味や嗜好を同じくする閉鎖的な仲間集団を作る傾向も生まれてくる。そのため、疎外感を感じたり、友達との間で悩んだりすることが今まで以上に見られるようになるので、健全な友達関係を育てていくことが一層重要になる。友達同士の相互の信頼の下に、協力して学び合う活動を通してお互いに磨き合い、高め合うような、真の友情を育てていくことが強く求められる。

・本資料は、石川理紀之助が秋田県庁職員の農業指導官としての実績をあげながらも、指導に限界を感じ、自主的な農業研究団体を立ち上げた話を基にしている。当時、県内各地でそれぞれ農事改良に当たっていた農業の達人たちを説得し、同じ目標を目指して組織として行動することを共有した理紀之助であった。これまでに得た知識や技術を包みかくさず教え合うことで老農たちから信頼を得て、その信頼の積み重ねで全体の進歩を図ろうとした。互いの人格の尊重を基盤とした信頼を築き、協力して助け合おうとする姿を期待したい。

三 展開例

1 「私たちの道徳 小学校五・六年」の「だけど…いいことばかりじゃないよね」（七十二頁）のラ・ロシュフコーの言葉を読み、友達について考えていることを発表し合う。

2 資料「得がたいものは信頼です」を読んで、話し合う。

(1) 県庁職員として実績をあげながらも悩んでいた理紀之助の考えを想像してみよう。

・ただ指導するだけでは県全体がなかなかよくなるらない。
・いっしょに作業をしながら学び合いたい。

(2) 「信頼は、つつみかくさず教え合うことから生まれます」ということは、理紀之助のどんな考えから来ているのでしょうか。

・自分のもっている知識や技術をみんなのために使ってもらいたい。

3 自分を知ってもらいたいし、みんなのことも知りたい。
自分自身を振り返って話し合う。

4 友達を信頼して協力できた場面を想起し、そのときの気持ちと協力できたわけについて話し合う。

4 「私たちの道徳 小学校五・六年」の「だけど…いいことばかりじゃないよね」のラ・ロシュフコーの言葉をもう一度読み、友達について考えが変容した点を出し合い、まとめとする。

四 指導上の留意点及び工夫

・展開例2の(1)では、指導する立場と指導される農民の立場に立つて考えることができるように、高学年としてリーダー的な仕事をしているときの気持ちを想起し具体的な場面に置き換えて考えられるようにする。

・展開例2の(2)では、単なる言葉の解釈にとどまらないように、理紀之助がしてきたことを想起させるようにする。

・展開例3では、これまでの学校生活や家庭での具体的な場面から友達を信頼し協力できた体験を想起させ、うまくできたポイントに気付かせるようにする。

民之助を追って 千島へ（小学校高学年3―1）

一 ねらい

生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重しようとする心情を育てる。

二 資料の特質

・この段階においては、生命の誕生から死に至るまでの過程を理解することができる。また、様々な人々との支え合いの中で一人一人の生命が育まれることが分かる。さらに、生命が祖先から自分そして子孫へと受け継がれていくことをより深く理解できるようになる。それらを通して、生命のかけがえのなさを自覚できるようにすることが重要である。人間の誕生の喜びや死の重さ、生きることの尊さ、共に生きることの素晴らしさなどを考えることから、自他の生命を尊重し力強く生き抜こうとする心を育てるとともに、生命に対する畏敬の念を育てることが大切である。

・本資料は、石川理紀之助が、自分の息子民之助を探しに千島列島を訪れる場面である。いつものことであるから大丈夫であろうという思いや心当たりを探しても手がかり一つ見つからない不安、名簿に名前を見付けたときの期待感、死亡説を聞いたときの驚き、遺骨を確かめたときの絶望感など、生命を基にした揺れ動く感情に共感を得るであろう。理紀之助が泣き崩れたときの後悔の念とともに、今までの自分の生き方を自問するくだりは、息子の意志を引き継いで生きることに向かう。自他の生命を尊重し、強く生きて行こうとする姿を期待したい。

三 展開例

2 1 生命尊重に関わる児童のアンケート調査結果を基に話し合う。
資料「民之助を追って 千島へ」を読んで、話し合う。

(1) 家出から半年たっても戻らない民之助に対して、理紀之助はどんな気持ちで旅に出たのでしょうか。

・早く会いたい。何としてでも連れて帰る。

・連絡が取れなくて心配だ。元気でいてくれたらどこにいてもいい。
(2) 民之助が死んだという知らせを聞いたときの理紀之助の気持ちはどうだったでしょう。

・そんなはずはない。何かの間違いだ。

・この目で確かめるまでは信じられない。

(3) 焼けた土にまじった骨を見た時、後悔して自問している理紀之助に民之助はどんな言葉をかけるでしょうか。

・私の意志を父さんが継いでくれ。

・私の本当の気持ちに気付いてくれたのだから、これからはもっと多くの人のために頑張ってほしい。

3 自分自身を振り返り、生命について考えたことや考えたことについて話し合う。

・生命は自分だけのものではなく、家族や身近な人の深い愛情や思いに支えられている。自分の生命をもっと大切にしていきたい。

4 「私たちの道徳 小学校五・六年」の「今、多くの人との関わりの中で生きている」（百く百一頁）を読んで、学習のまとめをする。

四 指導上の留意点及び工夫

・ねらいとする道徳的価値が家族愛に偏らないように、生命尊重に関わる導入を行う。

・展開例2の(1)(2)では、理紀之助の息子の生命に関する揺れ動く思いに共感できるように、生命尊重の価値に照らして板書で整理する。

・展開例2の(3)では、理紀之助の後悔や無力感、今までの公務を否定する自問を押さえた上で、民之助だったら理紀之助にどんな言葉を投げかけるのかを想定させることにより、意志をつなぐことが生命を尊重することになることに気付かせるようにする。

「本当のリーダー」とは（小学校高学年4―③）

一 ねらい

身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たそうとする心情を育てる。

二 資料の特質

・ 集団に属する一人一人が、集団の活動に積極的に参加し、集団の意義に気付き、その中で自分の位置や役割を自覚して責任を果たすとともに、主体的に協力して全体の向上に役立とうとする態度をもつことが重要である。この段階においては、身近な集団をまとまりのあるものとして捉え、いくつかの集団に属しながら、それぞれの目標に合わせて活動することができることから、学校や地域の中でも、学級集団、児童会やクラブなどの異年齢集団、遊び仲間や各種少年団体などの身近な集団において、自分の立場や全体の動きを自覚できる活動に主体的、積極的に参加できるようにしていく必要がある。それらを通して自分の役割と責任を果たすとともに、成員相互の関わりの大切さや、協力して目標を達成することのよさに気付くことができるよう指導することが大切である。

・ 本資料は、石川理紀之助が、息子民之助の死から乗り越えるべく講演旅行に出向いた際に、今までの山田村経済会の取組についてまとめたものである。リーダーとしての心構えの根幹となる部分であり、高学年の児童にとっては共感できる部分も多いと思われる。自分の役割と責任を自覚し、進んで集団生活の向上を図ろうとする姿を期待したい。

三 展開例

1 今までの行事などでリーダーとしての活動を振り返る。

2 資料『「本当のリーダー」とは』を読んで、話し合う。

(1) 「教訓十四箇条」から自分たちに取り入れたい「本当のリーダー」の心構えを選ぶ。

(2) 選んだ心構えごとのグループで、取り入れたい理由について話し合う。

・ 運動会では自分から進んで仕事に取り組みなかったので、進んで行動する一条を選んだ。

・ 縦割り活動では自分たちがしたいことをただやってきたが、みんなのことを考えてやらなければいけないと思ったので、十一條を取り入れた。

3 これからの生活でどのようなリーダーになりたいかを考える。

(1) 2の活動から、自分でなりたい「本当のリーダー」の姿を考える。

・ 全体のことをよく見て、自分に何ができるか、何をしなければならぬかを考えて努力できるリーダーになりたい。

・ 自分から進んで行動して、みんなの手本となるリーダーになりたい。

4 「私たちの道徳 小学校五・六年」の「集団の中で自分の役割と責任を果たす」（百四十二頁）を読んで、学習のまとめをする。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 展開例2の(2)では、「本当のリーダー」の心構えとして取り入れたい理由について、選んだ心構えごとのグループ内で話し合うようにし、同じ心構えでも取り入れたい理由が違ったり、違う心構えでもつながりがあったりすることに気付くことができるようにする。

・ 展開例3の(1)では、取り入れる心構えを、「六年生を送る会」に向けて掲げていくことを確認し、集団の中で自分の役割を自覚できるようにする。

谷頭のみんなといっしょに（小学校高学年4―③）

一 ねらい

身近な集団に進んで参加し、協力して主体的に責任を果たそうとする実践意欲を育てる。

二 資料の特質

・ 集団に属する一人一人が、集団の活動に積極的に参加し、集団の意義に気付き、その中で自分の位置や役割を自覚して責任を果たすとともに、主体的に協力して全体の向上に役立つとする態度をもつことが重要である。この段階においては、身近な集団をまとまりのあるものとして捉え、いくつかの集団に属しながら、それぞれの目標に合わせて活動することができることから、学校や地域の中でも、学級集団、児童会やクラブなどの異年齢集団、遊び仲間や各種少年団体などの身近な集団において、自分の立場や全体の動きを自覚できる活動に主体的、積極的に参加できるようにしていく必要がある。それらを通して自分の役割と責任を果たすとともに、成員相互の関わりの大切さや、協力して目標を達成することのよさに気付くことができるよう指導することが大切である。

・ 本資料は、石川理紀之助が、宮崎県庄内村谷頭の立て直しを前田正名に懇願され出向いた時の話である。谷頭に到着し、指導に取りかかろうとしたが、村一帯に広がったあきらめムードを感じ、仲間と言った「指導しに来たのだ」という考えを捨てよう。」という言葉を基にしたものである。リーダーとしての心構えの根幹となる部分であり、児童にとっても高学年として過ごしている中で共感できる部分も多いと思われる。指示して動かないリーダーではなく、みんなのために自分から進んで実践しようとする姿を期待したい。

三 展開例

1 自分が取り入れたい「本当のリーダー」の姿を明らかにする。
2 資料「谷頭のみんなといっしょに」を読んで、話し合う。

(1) 理紀之助が仲間に対して話した内容を考える。
・ 教えてあげるというのではなく、自分たちから先になって手本を見せていっしょにやるようにしよう。

・ あいさつなどこちらから進んでやって、村の人たちとまずは仲よくなるう。

(2) 資料後半を読み、理紀之助のリーダー観を確認し、自分たちの考えた解決策とのつながりを考える。

・ やはり理紀之助たちは、自分たちの行動で手本となるように努力したのだな。自分たちも実行できそうだな。

3 これからの生活で、「本当のリーダー」に近づく方法を考える。

・ 「六年生を送る会」まで、実行委員の役割を責任をもって果たす。

4 「私たちの道徳 小学校五・六年」の「集団の中で自分の役割と責任を果たす」（百四十二頁）を読んで、学習のまとめをする。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 展開例2の(1)では、宮崎県谷頭の農民のあきらめ感を悟り、理紀之助が仲間と言った言葉を考えさせることによって、リーダーとしての大原則に気付くことができるようにする。

・ 展開例2の(2)では、資料後半から理紀之助が仲間と言った言葉を紹介し、自分たちが考えたこととのつながりを捉えさせることによって、これからの生活の具体的な問題場面においても実践していこうとする意欲を高めるようにする。

農業の未来を開く（小学校高学年4―④）

一 ねらい

働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役立つことをしようとする心情を育てる。

二 資料の特質

・この段階においては、特に勤労を尊ぶ心を育てながら、働くことの意義を理解して社会の役に立つことができるように指導する必要がある。つまり、勤労が自分のためだけではなく、社会生活を支えるものであることを理解し、社会への奉仕活動など公共のために役立つ活動に目を向け、積極的に取り組むことができるようにすることが重要である。また、そのことから得られる喜びを基に、社会に奉仕し、公共のために役立つとする心構えを育てることが望まれる。

・本資料は、石川理紀之助が秋田県庁職員であったところに、秋田県農業が抱える緊急課題である「腐米」の原因追及や対応策の功績とともに、これらの知識や技術を生かして「老農」を動かし、種子交換会を開催した場面を基にしている。当時の閉鎖的とも言われる各地区の農業の達人を動かし、広い立場に立つて秋田県全体のために働いた理紀之助の公共心は、崇高なものである。勤労が自分のためだけではなく、社会生活を支えるものとして捉え、積極的に取り組もうとする姿を期待したい。

三 展開例

1 「種苗交換会」について知っていることを発表し合う。
2 資料「農業の未来を開く」を読んで、話し合う。

(1) 理紀之助は、県庁職員として秋田県農業の課題にどのような気持ちで解決しようとしたのでしょうか。

・自分が頑張れば、多くの困っている人たちを救うことができるかも知れない。

・みんなのためになることが自分のやりがいだ。

(2) 「老農」たちを動かしたのはどうしてでしょう。

・自分にとっても、老農にとっても、秋田県にとっても、みんながよくなるようにしたい。

・みんなのよさを生かして、秋田県全体をよくしていきたい。

3 自分自身を振り返って話し合う。

・学校や地域などで、公共のために役立つことをすることについて、今の自分の状態とできない場合の迷いについて話し合う。

4 「私たちの道徳 小学校五・六年」の「働くということ」（百五十二頁）にある近江商人の「三方良し」を紹介し、学習のまとめをする。

四 指導上の留意点及び工夫

・展開例2の(1)では、秋田県庁職員として、県全体のことを考えてよりよくしようとするのが、理紀之助にとつてのやりがいであったことに気付くことができるように、思いや考えを広げ深めさせるようにする。

・展開例2の(2)では、老農たちを動かしたわけについて考えさせることによって、自分のやりがいとともに老農にとってもメリットがあり、ひいては県全体にも好影響を与えたことを捉えられるようにする。

・展開例3では、公共心に対する児童の自分自身がどのような状態にあるのかを把握できるようにし、道徳的価値の実現についての難しさなどについて考えを深める場面とする。

草木谷に暮らす（中学校第2・3学年1―②）

一 ねらい

より高い目標を目指し、希望と勇気をもって着実に最後までやり抜こうとする心情を育てる。

二 資料の特質

・人間としてよりよく生きるには、目標や希望をもつことが大切である。日常生活の中のほんの小さな目標であっても、それが達成されたときには満足感を覚え、自信と勇気が起こるものである。このような達成感は、自己の可能性を伸ばし、人生を切り拓いていく原動力となり、次のより高い目標に向かって努力する意欲を引き起こすことにもなる。このことを積み重ねる中で、人生の理想や目標を達成しようとする強い意志が養われ、生きることへの希望も育まれてくる。中学生の時期は、自分の好むことや価値を認めたものに対しては意欲的に取り組む態度が育ってくる。また、希望と勇気をもって生きる崇高な生き方に憧憬をもつ年代でもある。しかし、障害や困難に直面すると簡単に挫折し物事をあきらめてしまうこともあり、理想どおりにいかない現実には悩み苦しむこともある。指導に当たっては、具体的な生活の中で目標を達成した経験を振り返らせたり、日常的な努力で達成できる目標をもたせたりすることが大切である。そして、達成できたときの成就感や満足感を繰り返し味わわせることを通して、希望と勇気が生まれてくることを自覚するよう指導することが重要である。

・本資料は、理紀之助の山田村経済会の取組を基にした経済論についての批判を受けて、極貧状態でも利益が上がることを自らの生活をもって立証するために、草木谷で過ごした三年間の様子をまとめたものである。

三 展開例

- 1 「私たちの道徳 中学校」の「目標を目指しやり抜く強い意志を」（十六頁）を読んで価値の方向付けを図る。
 - 2 資料「草木谷に暮らす」を読んで話し合う。
 - (1) 自分の経済論を非難されたときに、理紀之助はどんな気持ちだったのでしょうか。
 - ・ 農家に生まれ、農民のために今まで頑張ってきた。非難されるようなことはしていない。
 - ・ 農家はみな貧しく、余裕がないのは確かだ。どんな貧しい農家でも利益が出るように、まずは自分でやってみよう。
 - (2) どんな思いや目標が三年間もの極貧生活を支えたのでしょうか。
 - ・ 農民の気持ちを理解できるようにになりたい。その上で、農民の暮らしをよくしたい。
 - ・ どんな状態であっても、すべての農民がこの方法で頑張れば利益が出て暮らしがよくなることを実証したい。
 - (3) 理紀之助の「心の蔵書」とは何でしょう。
 - ・ 最後までやり遂げる力
 - ・ 他者を思いやる気持ち
 - ・ ぶれない目標
 - 3 「私たちの道徳 中学校」の「少年よ 大志をいだけ」（十七頁）を読み、中学校で達成したい目標を考える。
 - 4 3で考えた目標とそう立てた理由とを結び付けて「私たちの道徳」に記入する。
- #### 四 指導上の留意点及び工夫
- ・ 展開例2の(1)では、批判をされたことに対する反骨精神よりも、農民の暮らしのすべてを知りたい、そして農民の役に立ちたいという、理紀之助の純粹な気持ちに目を向けさせるようにする。
- ・ 展開例2の(3)では、残った「心の蔵書」を考えることにより、理紀之助の目指したものについて気付かせたい。

吉凶屏風訓言（中学校第2・3学年1―5）

一 ねらい

自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求しようとする心情を育てる。

二 資料の特質

・これまでや現在の自分、そして将来こう在りたいという自分を静かに見つめることは、自己の向上を願って生きていく上で重要なことである。その人固有の個性を生かし伸ばしていくことは、人間の生涯をかけての課題でもある。指導に当たっては、自己の欠点や短所の追求のみに偏ることなく、かけがえのない自己をまずは肯定的に捉えようと（自己受容）、自己の優れている面などの発見に努め（自己理解）、自己との対話を深めつつ、更に伸ばしていくようにすることが大切である。また、自分のよさは自分では分からないことが多いので、生徒相互の信頼関係を基盤として互いに指摘し合い、高め合う人間関係をつくっていくことが重要となってくる。その意味でも、優れた先人の生き方との感動的な出会いを広げる中で、充実した人間としての生き方についての自覚を深め、自分自身のよさや個性を見いだしていくことができるようにすることが大切である。

・本資料は、理紀之助が六十一歳の時、山田経済会などで立て直しに関わってきた山田村の人々に訓書として書き残したものである。訓書の形式はとっているが、自分の生き方を見つめた言葉であり、だれにとっても共感できる部分が多い。しっかりと自己を見つめ、個性を伸ばして強く生きて行こうとする姿を期待したい。

三 展開例

1 小学校で学んだ石川理紀之助の業績や、知っている名言などにつ

いて想起する。

2 資料「吉凶屏風訓言」を読んで、話し合う。

(1) 「吉凶屏風訓言」から、自分のこれからの生き方に取り入れていきたい言葉を選ぶ。

・正直さと礼儀の大切さは、部活動を通じて再確認した。これから大切にしていきたい。

・自分は何かあるとすぐにかつとなって投げ出してしまうことがあるので、我慢することを取り入れたい。

(2) 選んだ言葉ごとのグループになり、選んだ理由や自分の特徴との関わりについて話し合う。

・礼儀正しくが自分ではなかなかできないでいる。みなさんから何かアドバイスはないか。

・部活の時にはしっかりとできているよ。相手を尊敬する気持ちをいつももてるといいのではないか。

3 展開2から自分自身を振り返り、なりたいたい自分について考えてまとめる。

・自分では悪い所と思っていたが、友達はやさとして認めてくれた。ただ我慢するのではなく正しいと思うことをずっと続けるのも我慢だと思った。

・下の学年の人にいつでも笑顔でいることがやさじだと思っていたが、その人に将来どうなっってほしいのかを考えるのが真のやさじと思った。

4 「私たちの道徳 中学校」の「あなたらしさがあなたの良さになる 自分の中にある『良い所』『改めたい所』（四十〜四十一頁）」を読んで、学習のまとめをする。

四 指導上の留意点及び工夫

・展開例2の(1)(2)では、生徒相互の信頼関係を基に、気軽に指摘し合うことができるように、本人が悪いと捉えていたことでもよい場面がなかったか想起させるようにする。

この土地の一員として（中学校第2・3学年2―②）

一 ねらい

相手の立場を尊重しながら、思いやりの心で関わろうとする道徳的実践意欲を育てる。

二 資料の特質

・他の人との関わりの中で、温かい人間愛の精神を深め、これを身に付けることは人間として極めて大切なことである。それは、他の人の立場を尊重しながら、親切にし、いたわり、励ます生き方として現れる。したがって、思いやりの心の根底には、単なる哀れみや同情ではなく、相手に対する深い理解と共感がなければならぬ。そのような生き方に触れたとき、人は自ずと感謝の念を抱くようになる。この段階においては、人間愛に基づく他の人との関わりをもつことの大切さを理解できるようになってくる。しかし、とかく利己的、自己中心的になりやすく、他を省みない行動に走る場合がある。単に思いやりの大切さに気付かせるだけでなく、根本において自分も他の人も、ともにかけがえのない人間であるということを自覚できるようにすることが大切である。

・本資料は、理紀之助が同志七名とともに、非常な決意をもって宮崎県に向かい、貧しい村を立て直す姿を描いたものである。極貧で、他村からもさげすまれ、それを克服することをあきらめている村の雰囲気を感じ取った理紀之助らは、率先して村の一員になりきり、決して欠点を口にせず、村のために働き続ける。このような姿を見て、村人は次第に敬慕の念をかき立てられていく。それは、村人たちの苦しい立場を理解・共感しながら懸命に努力した理紀之助らの生き方に「思いやり」を感じたからであることに気付かせたい。

三 展開例

1 「思いやり」について感じていることや、思いやりを感じた場面を想起する。

2 資料「この土地の一員として」前半を読んで、話し合う。

(1) 谷頭の村人のシルエットを見て、どのような状況にあるかを予想する。

・あきらめきっている。

・働く気がなさそう。

(2) 働く気のない村人に自分ならどうするかを考える。

・自分たちでやってみせることで手本になるようにする。

・何を言われても我慢して、ずっと励まし続ける。

3 資料「この土地の一員として」後半を読み、本当の思いやりについて考えてまとめる。

・相手の立場や気持ちを尊重することが、本当の「思いやり」の第一歩だ。

・理紀之助は何があっても秋田に帰らない覚悟で来ているのに、上から目線ではなく村人のためを思っていることをしている。今まで感じていた「〇〇してあげる」ことが本当の「思いやり」ではないことが分かった。

4 「私たちの道徳 中学校」の『思いやり』って……なんだろう？（五十五頁）を読んで、身近な場面での対応を考える。

四 指導上の留意点及び工夫

・展開例2の(2)では、問題場面に対する理紀之助の言動を考えることで、生徒の現状としての「思いやり」を捉えられるようにする。

・展開例3では、理紀之助が同志に向けて言ったことや日記から、人間愛に満ちた「思いやり」を捉えさせ、生徒の現状の「思いやり」と比較したり結び付けたりして、本当の「思いやり」について考えることができるようにする。

心のじょうぎ (中学校第2・3学年3—③)

一 ねらい

人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きることに関心を見いだすように努めようとする心情を育てる。

二 資料の特質

・中学生の時期は、人間が内に弱さや醜さをもつと同時に、強さや気高さを併せてもっていることを理解することができるようになる。しかし、なかなか自分に自信がもてないでいるだけに、劣等感にさいなまれたり、人をねたみ、恨み、うらやましく思ったりすることもある。また、一方では、崇高な人生を送りたいという人間のもつ気高さを追い求める心もある。したがって、自分を含め、人はだれでも人間らしいよさをもっていることを認めるとともに、決して人間に絶望することなく、だれに対してもその人間としてのよさを見いだしていく態度を育てることが大切である。

・本資料は、石川理紀之助が自らの行動指針として大切にしていた言葉を直接聞いた教え子が、後世になつて書き記したものである。世間の風潮に惑わされることなく信念を貫いてきた理紀之助の行動指針に触れることにより、内にある弱さや醜さを乗り越えるヒントとなることであろう。しっかりと自己の「心のじょうぎ」を模索し、人間として生きることに関心を見いだすように努める姿に期待したい。

三 展開例

1 今までの生活を振り返り、目標を立てたのに達成できなかった経験やその理由について想起する。

2 資料「心のじょうぎ」を読んで、話し合う。

(1) 石川理紀之助の「心のじょうぎ」とはどんなものだろう。

・弱い心を乗り越えた強い心

・自分の大切にしているところ

・これだけは譲れない自分のこだわり

(2) 理紀之助はどのようにして「心のじょうぎ」をもつことができたのか。

・強い自分をもっていなければ、人に指導することができないから。

・自分の弱さや醜さを認め、それを乗り越えようと目標を立てたからではないか。

3 自分自身を振り返り、自分が目指す生き方を基に「私の心のじょうぎ」をつくる。

・相手の立場になつて考える私

・今日やることは明日に延ばさない強い私

・部活動に対して一生懸命に打ち込む私

4 「私たちの道徳 中学校」の『今からの私』を育てていきたい」(百二十二頁)を読んで、学習のまとめをする。

四 指導上の留意点及び工夫

・展開例1では、人間としての弱さをさらけ出す部分であるので、みんなの前で発表できないようであれば、事前に書いた行事作文などから拾い出すようにする。また、その弱さをさらけ出したと言ふことはそれを克服したいという前向きな気持ち強いことだと称揚するようにする。

・展開例2の(1)(2)では、理紀之助の「心のじょうぎ」を得るまでの自分の弱さや醜さと対峙してきた経緯を捉えられるように、生徒たちの今の自分と同じであることに気付かせるようにする。

教訓十四箇条（中学校第1・2学年4―(4)）

一 ねらい

自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努めようとする心情を育てる。

二 資料の特質

・人間は、それぞれ目標や立場を異にする集団に属しながら、共同で日々の生活を営んでいる。人が、集団の一員としてよりよく生きていくためには、自分の属する集団の意義を十分に理解することが大切である。各人がその成員としての役割と責任を自覚して、個々が責任を果たし集団の目標を達成する中で集団生活の向上が図られ、自己の実現もなされる。また、集団は成員相互の協力があつて維持されるものであるから、互いに人間関係を大切にするとともに、励まし合うという協力関係をつくりあげていくことが大切である。この時期は、学級、学校、地域社会などの様々な集団の中で互いに深く関わり合つて相互理解を深め、それぞれの集団の中で人間的な成長を遂げるのによい時期であるが、一方で、集団の一員としての所属感や一体感を強く求め、自己の思いのみを先行させてしまうこともある。集団生活の向上には、集団の規律を守ることが必要であり、そのためには生徒一人一人が自らの役割と責任を果たすという自覚が大切である。集団の中では、成員同士が互いに規律を守り、協力し合つて、集団生活の向上に努めることが求められている。

・本資料は、石川理紀之助が、息子民之助の死から乗り越えるべく講演旅行に出向いた際に、今までの山田村経済会の取組についてまとめたものである。リーダーとしての心構えの根幹となる部分であり、生徒にとっては共感できる部分も多いと思われる。自分の役割と責任を自覚し、進んで集団生活の向上を図ろうとする姿

を期待したい。

三 展開例

- 1 今までに取り組んだ生徒会活動や合唱コンクールなどの学級としての取組を振り返る。
- 2 資料「教訓十四箇条」を読んで、話し合う。
 - (1) 「教訓十四箇条」を自分たちに取り入れるために読み替える。
 - ・二条は、他人のことをどう言う前に、自分のことをまずしっかりと頑張ろうと読み替えられるぞ。
 - ・十四条は、目先のことよりこつこつと努力を重ねる大切さのことを言っているのではないか。
 - (2) 読み替えた教訓から学級目標として掲げていくものを選ぶ。
 - ・自分たちから進んで動く〇年〇組になろう。
 - ・学校や地域の役に立つ〇年〇組になろう。
- 3 自分自身を振り返り、今後になりたい集団の中の自分について話し合う。
 - ・仲間や後輩に注意して仕事や活動をさせるのではなく、自分から率先して働き手本となるようにしていきたい。
 - ・少数の意見にもきちんと耳を傾け、意見を出し続ける人になる。
- 4 「私たちの道徳 中学校」の「二人一人が輝く集団づくり」（百六十六～百六十七頁）を読んで、学習のまとめをする。

四 指導上の留意点及び工夫

- ・展開例2の(1)では、自分たちの学級の現状と照らし合わせ、課題を解決するためや、よさを更に伸ばすために取り入れていくように読み替えることを伝える。
- ・展開例2の(2)では、学級目標として全員で目指していくという視点で選ばせるようにする。
- ・展開例3では、2で決まった学級目標における自分の役割という視点を取り入れるようにする。

「第三章

学習指導モデル集」

1 課題解決型の道徳学習例

(1) **ねらい** 石川理紀之助の年表から自分の課題を設定し、読み物資料や映像資料等で調べ、理紀之助の考えや人となりの素晴らしさを実感をもって捉える。

(2) **展開** 【中学校第2学年を例にした学習構想】

①理紀之助の年表を見て、疑問に思ったことや調べてみたいことを出し合う。

②理紀之助の考えや人となりについて課題ごとに調べる。

【予想される課題と解決方法】

- ・種苗交換会を始めた理由
→読み物資料、DVD
- ・官職を辞めてまで農家を救済しようとした決意
→読み物資料、DVD
- ・長男の家出の理由と理紀之助の思い
→読み物資料
- ・草木谷に山居した理由と生活の様子
→現地見学伝習館取材、体験活動
- ・宮崎県にまで行き指導をした理由や覚悟、苦労
→読み物資料
- ・家族に先立たれても救済活動に立ち上がった理之助の思い
→予想を基にした話し合い
- ・死ぬ直前まで他地域の指導に当たった思い
→読み物資料、DVD、伝習館取材→話し合い

③調べたことをまとめ、発表会をして共有する。

西暦	年号	年齢	事項
1845	弘化 2	1	誕生 秋田県小泉村 父：奈良周喜治（三男）
1853	嘉永 6	9	手習師匠について学ぶ
1865	慶応 1	21	山田村石川長十郎の婿養子となる
1867	3	23	農業耕作会をつくる
1869	明治 2	25	肝煎後見人となる
1872	5	28	秋田県租税課に出仕する
1877	10	33	内国勸業博覧会へ用務をおびて上京途中各県の農業視察 勸業議会一支会をつくる
1878	11	34	腐米改良事業に取り組む 種苗交換会を始める
1880	13	36	歴観農話連をつくる
1883	16	39	官職を辞めて農家経済の道を教えるために帰村する
1885	18	41	山田経済会をつくり救済事業を始める
1887	20	43	長男民之助家出 訪ねて千島に渡り遺骨を持ち帰る
1889	22	45	山田村救済一期の目標完遂 草木谷に山居する
1894	27	50	第1回農事大会に出席 有行賞を受ける 北白川宮殿下の命により九州各県を巡講
1895	28	51	農会をつくり郡農会長・県農会長となる 山形の奥羽農事大会に出席 四国各県・千葉県を巡講
1896	29	52	適産調を始める
1902	35	58	同士7名とともに宮崎県に行き前田正名（元農商務次官）の事業に協力して庄内村谷頭の指導に当たる この年適産調終了
1903	36	59	あとつぎ老之助（おいのすけ）病死
1912	45	68	乾田適地調査を行う 強首村九升田の救済に着手する
1913	大正 2	69	宮城県巡講 秋には青森地方の凶作地視察巡講
1914	3	70	角間川町木内布晒地区の指導に取りかかる 夫人スワ子病没
1915	4	71	強首村九升田指導第一期完了 9月8日永眠

2 総合単元型の道徳学習例

- (1) **ねらい** 石川理紀之助の生涯から自分の課題を設定し、他教科等との関連から大単元を構成し、理紀之助の考えや人となりの素晴らしさを追究する。
- (2) **展開** 【小学校第5学年を例にした学習構想】

道徳の時間 内容項目 『資料名』	総合的な学習の時間	他教科等
1－(2)希望、勇気、不撓不屈 「かけ板の音はひびく」	「わたしたちのまち 〇〇から発信！」 ・地域のよさを知るための 取材活動 ・調べたよさをパンフレット にまとめる活動	社会科 「これからの食料生産とわたしたち」 「米づくりのさかんな地域」 ・代かき・田植え体験 理科 「植物の発芽と成長」 国語科 「豊かな言葉の使い手になるためには」
4－(3)役割と責任の自覚 「『本当のリーダー』とは」 「谷頭のみんなといっしょに」	・校外学習に行った場所で、 観光客にできたパンフレット を配布し情報発信する活動	国語科 「百年後のふるさとを守る」 社会科 「国土の地形の特色」 「環境を守るわたしたち」 音楽科 「日本と世界の音楽に親しもう」 外国語活動 「あいさつをしよう」
3－(1)生命尊重 「民之助を追って 千島へ」	「わたしたちにできること みんなでにこにこ大作戦」 ・宿泊研修における自然体 験活動・奉仕的作業	家庭科 「わたしと家族の生活」 理科 「魚のたんじょう」「人のたんじょう」 体育科（保健領域） 「不安やなやみへの対処」 「学校や地域でのけがの防止」
4－(4)勤労、社会奉仕、公共心 「農業の未来を開く」	・地域に対するボランティア活動	国語科 「千年の釘にいどむ」 社会科 「米づくりのさかんな地域」 ・稲刈り体験・脱穀体験 家庭科 「やってみよう 家庭の仕事」 特別活動（学校行事） 「大清掃」 特別活動（児童会活動） 「6年生を送る会」

(4) 第2時の実際

① 本時のねらい

身近な集団に進んで参加し、協力して主体的に責任を果たそうとする実践意欲を高める。

② 学習過程

段 階	学 習 活 動	教師の指導・支援 評価（評価方法）
導 入 (5分)	1 前時での振り返りを紹介する。	・ 目指すリーダー像がはっきりとした例を2、3紹介する。
展 開 (30分)	「本当のリーダー」に近付くためには、どうしたらよいだろうか。	
	2 読み物資料「谷頭 みんなといっしょに」を読んで話し合う。(15分) ○前半を読み、理紀之助が仲間に対して話した内容を考える。 個→グループ ○後半を読み、理紀之助のリーダー観を確認する。 3 これからの生活で「本当のリーダー」に近付くためにはどうしたらよいのかについて考える。(15分) ◎2の活動から、本当のリーダーに近付く方法について考える。 個→全体	・ 前時に考えたリーダー像を具現化するための方策を考える時間であることを確認する。 ・ 理紀之助が仲間に対して言った言葉を考える手がかりや根拠となるように、第1時の教訓十四箇条を掲示しておく。 ・ 宮崎県谷頭の農民のあきらめ感を悟り、理紀之助が仲間と言った言葉を考えさせることによって、リーダーとしての大原則に気付くことができるようにする。 ・ 自分が目指すリーダーの姿で理紀之助が言った言葉を考えるようにさせる。 ・ 理紀之助の言動と、個やグループで考えたことが結び付いていることを確認し、称揚する。 ・ 実践意欲を高めるために、「6年生を送る会」をゴールと捉え、それまでに自分で実現可能なものという視点で考えるように助言する。
まとめ (10分)	4 本時のまとめをする。 ○本時の振り返りをする。 ○教師の説話を聞く。	自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たそうとする意欲を高めている。 (学習シート・発表) ・ 自分の考えの変容を、記述した内容の変化で確かめられるように、学習シートを工夫する。 ・ みんなで「本当の最高学年」を目指していくことを確認し、余韻を残して終わる。

3 複数時間を設定した学習例

第5学年 「道德の時間」 学習指導案

- (1) 主題名 わたしはもうすぐリーダーだから 4-(3)役割と責任の自覚
資料名『本当のリーダー』とは」「谷頭のみんなといっしょに」
- (2) ねらい 身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たそうとする心情を育て、実践意欲を高める。

(3) 第1時の実際

① 本時のねらい

身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚して責任を果たそうとする心情を育てる。

② 学習過程

段 階	学 習 活 動	教師の指導・支援	評価（評価方法）
導 入 (5分)	1 今までの行事などで、全校のリーダー補佐的な役割をした活動を振り返る。	・第5学年として、今までの行事などにどのような気持ちで関わってきたかを問うことで、ねらいとする価値への方向付けをする。	
	「本当のリーダー」になるためには、どんな心構えが必要だろうか。		
展 開 (35分)	2 資料『本当のリーダー』とは」を読んで話し合う。 ○「教訓十四箇条」から自分に取り入れたい心構えを選ぶ。(5分) 個 ○取り入れたい理由について話し合う。(15分) グループ→全体	・石川理紀之助が自分の村起こしをしたときに作った十四箇条であり、最高学年に向けての心構えに通ずることを伝えることで、進んで取り入れようとする意欲を高める。 ・選択しやすいように、十四箇条の中から児童に特に関係が深いと思われるものを、予め5つ程度に絞って提示する。 ・どの心構えを取り入れるかを自己選択させ、選んだ心構えごとのグループで選んだ理由について話し合うように助言する。 ・選んだ心構えが同じでも選んだ理由が違ったり、心構えが違って理由が同じだったりすることに気付くことができるように、全体で検討する場面を設定する。	
	3 これからの生活でどのようなリーダーになりたいかを考える。(15分) ◎2の活動から自分でなりたい「本当のリーダー」の姿を考える。 個→全体	・学級・学年・全校の中の一員として、自分の役割と心構えとを結び付けて考えることができるように、学習シートに記入する欄を設ける。	身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚して責任を果たそうとする気持ちを高めている。 (学習シート・発表)
まとめ (5分)	4 本時のまとめをする。 ○「私たちの道德」を読む。 ○本時の振り返りをする。	・いろいろな集団に属し、それぞれにおいてリーダーとしての役割が求められていることに気付くことができるように、「私たちの道德」P142の「集団の中で自分の役割と責任を果たす」を紹介する。 ・自分の考えの変容を、記述した内容の変化で確かめられるように学習シートを工夫する。	

小学校第5学年及び第6学年	中学校
1 主として自分自身に関すること	
(1)生活習慣の大切さを知り、自分の生活を見直し、節度を守り節制に心掛ける。	(1)望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け調和のある生活をする。
(2)より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する。	(2)より高い目標を目指し、希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつ。
(3)自由を大切にし、自立的で責任のある行動をする。	(3)自律の精神を重んじ、自主的に考え、誠実に実行してその結果に責任をもつ。
(4)誠実に、明るい心で楽しく生活する。	
(5)真理を大切に。進んで新しいものを求め、工夫して生活をよりよくする。	(4)真理を愛し、真実を求め、理想の実現を目指して自己の人生を切り拓いていく。
(6)自分の特徴を知って、悪い所を改めよい所を積極的に伸ばす。	(5)自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求する。
2 主として他の人とのかかわりに関すること	
(1)時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接する。	(1)礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとる。
(2)だれに対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にする。	(2)温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもつ。
(3)互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲よく協力して助け合う。	(3)友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合う。
(4)謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切に	(4)男女は、互いに異性についての正しい理解を深め、相手の人格を尊重する。
にする。	(5)それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解して、寛容の心を持ち謙虚に他に学ぶ。
(5)日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。	(6)多くの人の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分があることに感謝し、それにこたえる。
3 主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること	
(1)生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。	(1)生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する。
(2)自然の偉大さを知り、自然環境を大切に	(2)自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める。
する。	
(3)美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ。	(3)人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きること
	に喜びを見いだすように努める。
4 主として集団や社会とのかかわりに関すること	
(1)公徳心をもって法やきまりを守り、自他の権利を大切に	(1)法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、自他の権利を重んじ義務を確実に果たして、社会の秩序と規律を高めるように努める。
して進んで義務を果たす。	(2)公徳心及び社会連帯の自覚を高め、よりよい社会の実現に努める。
(2)だれに対しても差別をすることや偏見をもつことなく公正、公平にし、正義の実現に努める。	(3)正義を重んじ、だれに対しても公正、公平にし、差別や偏見のない社会の実現に努める。
(3)身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす。	(4)自己が所属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。
(4)働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役立つことをする。	(5)勤労の貴さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める。
(5)父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役立つことをする。	(6)父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を気付く。
(6)先生や学校の人々への敬愛を深め、みんなで協力し合いよりよい校風をつくる。	(7)学級や学校の一員としての自覚をもち、教師や学校の人々に敬愛の念を深め、協力してよりよい校風を樹立する。
(7)郷土や我が国の伝統と文化を大切に、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。	(8)地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努める。
	(9)日本人としての自覚をもって国を愛し、国家の発展に努めるとともに、優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献する。
(8)外国の人々や文化を大切にする心を持ち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める。	(10)世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する。

付録 「道徳の内容」の学年段階・学校段階の一覧表

小学校第1学年及び第2学年	小学校第3学年及び第4学年
1 主として自分自身に関すること	
(1)健康や安全に気を付け、物や金銭を大切にし、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする。	(1)自分でできることは自分でやり、よく考えて行動し、節度ある生活をする。
(2)自分がやらなければならない勉強や仕事は、しっかりと行う。	(2)自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げる。
(3)よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。	(3)正しいと判断したことは、勇気をもって行う。
(4)うそをついたりごまかしをしたりしないで、素直に伸び伸びと生活する。	(4)過ちは素直に改め、正直に明るい心で元気よく生活する。
	(5)自分の特徴に気付き、よい所を伸ばす。
2 主として他の人とのかかわりに関すること	
(1)気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する。	(1)礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する。
(2)幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。	(2)相手のことを思いやり、進んで親切にする。
(3)友達と仲よくし、助け合う。	(3)友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。
(4)日ごろ世話になっている人々に感謝する。	(4)生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する。
3 主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること	
(1)生きることを喜び、生命を大切にする心をもつ。	(1)生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にする。
(2)身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する。	(2)自然の素晴らしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にすること。
(3)美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ。	(3)美しいものや気高いものに感動する心をもつ。
4 主として集団や社会とのかかわりに関すること	
(1)約束やきまりを守り、みんなが使うものを大切にする。	(1)約束や社会のきまりを守り、公德心をもつ。
(2)働くことのよさを感じて、みんなのために働く。	(2)働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く。
(3)父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る。	(3)父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくる。
(4)先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しむ。	(4)先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合って楽しい学級をつくる。
(5)郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもつ。	(5)郷土の伝統と文化を大切にし、郷土を愛する心をもつ。
	(6)我が国の伝統と文化に親しみ、国を愛する心をもつとともに、外国の人々や文化に関心をもつ。

発行所 秋田県総合教育センター
発行日 平成28年 2 月19日
所在地 〒010-0101
秋田県潟上市天王字追分西29番地の76
T E L 018-873-7200（代表）
F A X 018-873-7201
U R L <http://www.akita-c.ed.jp/>

資 料 一 覧

分 類	資 料 名	道徳の内容項目	ページ
小学校 第3学年及び 第4学年	かけ板の音はひびく	1－(2)	1
小学校 第5学年及び 第6学年	得がたいものは信頼です	2－(3)	3
	民之助を追って 千島へ	3－(1)	5
	「本当のリーダー」とは	4－(3)	8
	谷頭のみんなといっしょに	4－(3)	11
	農業の未来を開く	4－(4)	13
中学校	草木谷に暮らす	1－(2)	15
	吉凶屏風訓言	1－(5)	18
	この土地の一員として	2－(2)	24
	心のじょうぎ	3－(3)	28
	教訓十四箇条	4－(4)	32